

都会で

——或は千九百十六年の東京——

芥川龍之介

青空文庫

一

風に靡なびいたマツチの炎ほのほほど無ぶ気味きみにも美しい青いろはない。

二

如何いかに都会を愛するか？——過去の多い女を愛するやうに。

三

雪の降つた公園の枯かれ芝しばは何よりも砂糖漬じにそつくりである。

四

僕に中世紀を思ひ出させるのは厳めしい赤煉瓦の監獄である。若し看守さへるなれば、馬に乗ったジアン・ダクの飛び出すのに遇つても驚かないかも知れない。

五

或女給の言葉。——いやだわ。今夜はナイホクなんですもの。

註。ナイホクはナイフだのフォオクだのを洗ふ番に当ることである。

六

並み木に多いのは篠懸である。椽も三角楓も極めて少ない。しかし勿論派出所の巡查はこの木の古典的趣味を知らずにゐる。

七

令嬢に近い芸者が一人、僕の五六歩前に立ち止まると、いきなり拳手の礼をした。僕はちよつと狼狽した。が、後ろを振り返つたら、同じ年頃の芸者が一人、やはりちやんと拳手の礼をしてゐた。

八

最も僕を憂鬱にするもの。——カアキイ色に塗つた煙突。電車の通らない線路の錆び。屋上庭園に飼はれてゐる猿。……

九

僕は午前一時頃或町裏を通りかかつた。すると泥だらけの土工が二人、瓦斯か何かの工事をしてゐた。狭い路は泥の山だつた。のみならずその又泥の山の上にはカンテラの火が一つ靡いてゐた。僕はこのカンテラの為にそこを通ることも困難だつた。すると若い土工が一人、穴の中から半身を露したまま、カンテラを側へのけてくれた。僕は小声に「あり

がたう」と言つた。が、何か僕自身を憐あはれみたい気もちもない訣わけではなかつた。

十

夜半やはんの隅田川すみだがはは何度見ても、詩人S・Mの言葉を越えることは出来ない。——「羊やうかのやうに流れてゐる。」

十一

「××さん、遊びませう」と云う子供の声、——あれは音おんの高低を示せば、×× San Aso bi-ma showである。あの音おんはいつまで残つてゐるかしら。

十二

火事はどこか祭礼に似てゐる。

十三

東京の冬は何よりも漬^つけ菜^なの茎の色に現^{あら}れてゐる。殊^ばに場末^{ばすゑ}の町々では。

十四

何かものを考へるのに善^よいのはカツフエの一番隅の卓^テ子^{エブル}、それから孤独を感じるのに善^よいのは人通りの多い往^{わう}来^{らい}のまん中、最後に静かさを味ふのに善^よいのは開幕中の劇場の廊下^{らうか}、……

(昭和二年二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1971（昭和46）年10月5日初版第5刷発行

入力校正：j.utiyaana

1999年2月15日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

都会で

——或は千九百十六年の東京——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>